※2017年3月号／月刊保育とカリキュラムに掲載!

秋田喜代美が語る

遊びの質を高めるための12例

秋田喜代美／東京大学大学院教育学研究科教授

第12回　遊びの質を考える研修メディア

12か月間、戸外、室内の遊びの質について、場やかかわりを通していっしょに考えてきました。その中で遊びの質を考えるときに大事なことのひとつは、遊びの場のデザイン、遊びの場にあるものの工夫、そして遊びのときの保育者のかかわりや居方と同時に、遊びを振り返る機会を、1年の中でどのようにしてつくっていくのかということかもしれません。

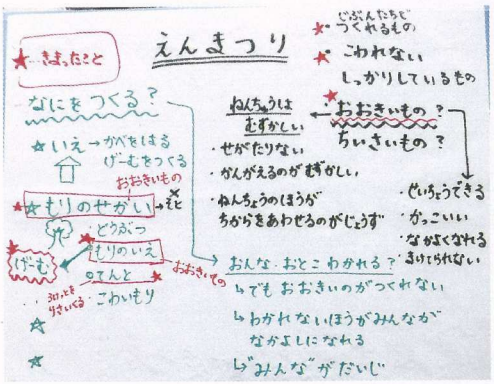
場やものの関係、子どもが夢中になる姿・瞬間をとらえるときには、写真が有効です。また、保育者がどのようにとらえてかかわったかを含めて考えるときには、事例と考察を基にしたエピソード記録がとても大切だと思います。さらに、そのときのやりとりをていねいに見ていく場合には、ビデオなどを短時間見たり、あるいは編集してその流れをとらえたりすることが有効でしょう。

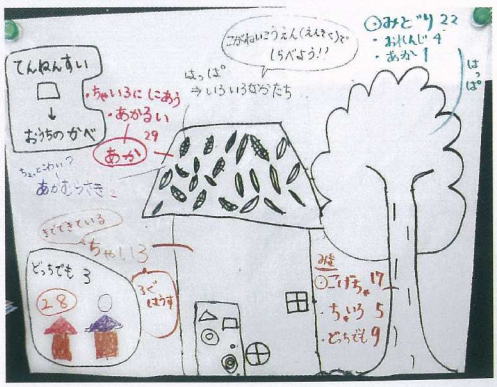
集団としての智慧(ちえ)の深まりをとらえる

先日私は、1枚の写真を、武蔵野東第一幼稚園・第二幼稚園の加藤先生に見せていただきました。この写真は年長組が園祭りの準備のために、子どもたちで話し合いを重ねたプロセスをホワイトボードに記したものです。これまで子どもの姿や作品、活動のプロセスを撮った写真は数多くありましたが、それらと共に子どもたち自身が何をどのように考えていったかを記録しておられるものは、あまりありませんでした。

このようにひとりひとりの子どものその時々の遊びの活動だけではなく、集団としてクラスみんなが議論を重ねながら遊びをつくりだしていったプロセスを写真に撮っておくことは、保護者の方の遊びへの理解につながります。また、子ども自身が困ったことや困難な状況をとらえて、みんなでいっしょに考える場を設けていくことの必要性や、役割分担したことを忘れないように「見える化」しておけます。ですから、子どもたちの遊びの指針になるという意味で、視覚環境ともなるでしょう。

遊びは体を動かすことが極めて大事ですが、その一方で、時には立ち止まってみんなで頭を抱えたり、議論したりすることでさらにおもしろい遊びができ上がっていきます。こうした体験こそが、園ならではの遊びの醍醐味といえるのではないでしょうか。子どもたちが遊びの始まりから終わりまでのプロセスを、時には「見える化」してみること。それが息の長い遊びを通した育ちを保障していくのに必要なのではないでしょうか。継続発展する遊び、挑戦的で創造的な遊びが、21世紀を担う子どもたちを育てていく力の基礎になる、ということができると思います。





（写真提供　学校法人武蔵野東学園　武蔵野東第一幼稚園・第二幼稚園）